　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　川崎支部支部長　山岸一雄　（執筆：河合・山岸））

**川崎支部便り　第47号　（2021年12月）**  
**オープンで各自が主役：川崎支部**

人生を豊かに（雑学のすすめ）

スコットランドで6週間を過ごし帰国したら、首、肩のこりがひどくなり、目は疲れてぼやけ、集中力は無くなり、腰まで痛くなったのは田中ランディ（1959年生まれの作家）です。友人から即回復の秘訣を教わったそうです。「医者自身が困った時に使う方法が一番効くのです。」それは「温める」ことです。ただ、それだけ。

「身体は、火傷と急性の炎症以外は、ほぼ温めると良い。年と共に軟骨が固くなって血流が悪くなる。特に首だ。耳の後ろを通っている筋肉が固くなると脳に血と酸素が行かなくなって脳機能が低下し、目も霞むし、喉や口が乾き、手が痺れる。」

どうすれば良いか。「ゆっくりと耳の後ろの筋肉をほぐして使い捨てカイロを手拭いで首に巻いて温めるだけ。」試してみました。本当に良く効きます。「使い捨てカイロは遠赤外線が出ているので、皮膚の奥まで温まるから。低温火傷には注意してね。」身体が楽になります。是非お試しあれ。

川 崎 点 描 ： 川崎支部活動拠点

　【「忠臣蔵・赤穂事件」と「縁（ゆかり）」がある川崎市⑦】

（江戸急進派と赤穂・上方の斬新（ざんしん）派との江戸調整会議）

　吉良の屋敷替により堀部らの江戸急進派は、討入りの好条件と考え、大石に討入りを迫りました。大石は急進派を説得するため、9月の上旬に赤穂浪士の原惣右衛門、潮田又之丞、中村勘助の3人を江戸に向かわせました。更に10月には浪士の進藤源四郎（＊１）と大高源五を江戸に向かわせました。しかし、江戸の急進派に同調させられてしまいました。そのため大石は自ら11月2日、江戸に下り急進派を説得するため、会議（江戸会議）を行いました。しかし、上方から派遣した同志たちは、早期の討入り派の堀部達に討入りの方向に同調してしまったこともあり、議論は堀部達の望む方向に一方的に進み、堀部達は討入りの日の期限を決断する様に大石に迫った様です。大石は浅野内匠頭の一周忌には結論を出したいと約束をしたのです。

　江戸急進派の堀部達は前記の様に、12月11日に吉良上野介が提出した隠居の許可が下りたことで、江戸急進派は焦り始めたのです。理由は、吉良の息子の養子先である米沢藩の上杉家が世上（世間でのうわさ）での噂や風聞等で、浅野内匠頭の様に真面目にやっている人が「損」をするという話と、一方の吉良のお咎め（とがめ）無しのずるい人間で、江戸郊外への屋敷替えから推測すれば「討入り」が有るのではないかと想像してもおかしくありませんでした。また、幕府から吉良へのこれ以上の処罰は望まないのではないか、更に吉良が米沢の江杉家に引取られたら、討入りも不可能となってしまい、江戸の急進派は浅野内匠頭の一周忌までに討入りすべきであると主張をしました。

　一方、大石内蔵助は浅野内匠頭の弟、浅野大学によるお家再興を願う事にも影響すると懸念し、吉良上野介を討つ事が無理なら吉良の息子の吉良左兵衛義周を討てば良いとの考えもあり、大学の閉門が解ける3年をみて、主君の内匠頭三周忌まで討入りを待ってお家再興にならなかった時に、討入りを実行しても後悔をしないと考えていたのです。大石は浪士の調整が大変でした。

　この様な中で、事件の翌年1702年（元禄15年）2月15日から京都の山科で、今後の進む方向を決める会議が数日間にわたり開かれました。「山科会議」です。この会議は直ぐの討入りの意見は少数で、しばらく様子見の結論になりました。

（筆頭家老大石内蔵助の苦悩と行動）

　山科会議で討入りの延期が決まり、大石内蔵助はお家再興の嘆願書を再度出しました。大石の背後には再興を願う家臣達がいて、簡単に再興を諦めるわけには行かない事情もあったのです。また、この頃から大石の頭には討入りは避けられないと、覚悟もしたと思います。この行動に累が及ばない様に、妻の「りく」を離縁し実家に返しました。この時大石は息子の主税に「寝ても覚めても吉良を打取る事を考えよ」と言った事が「江赤見聞記」に残されています。大石の妻は自分も「君父の志」を達するために役に立ちたいと申し入れましたが、大石は女人と一緒では内匠頭の為にならないと断ったことが「江赤見聞記」に残されています。

　実は大石は浅野大学を擁立した討入りを考えていたのです。浅野大学の閉門が解かれたら、直ぐに大学に討入りの許可を取った上で、吉良を討とうと考えていました。今までに何度も嘆願書を出し、討入りの時期を主君浅野内匠頭の三回忌まで待つ考えを持っていた事を、家臣達は読取る事が出来なかった様です。

　このため、討入りの時の口上書では、「君父の誉（ほまれ）、共に天を戴（いただ）くべからず」と仇討ちの概念を「父」から「君父」へと拡大しているのです。この様に拡大された価値観が武士社会へ受け入れられる事で、この赤穂事件は武士の生き方と、世の中に存在する正しいことと不正なことの意識を変え、武士道とはこの様なものであるとの考え方や、大石に家臣・藩士達が従う特定の集団へと変わったそうです。

　（江戸急進派、ますます大石を境地に追い込む）

　しかし江戸の急進派は山科会議で討入り延期の話合いを行ったのに従いませんでした。原惣右衛門達が堀部らに、大石を見捨てて江戸急進派を中心で吉良を討つ提案をしたのです。理由は、今であれば吉良も油断しているし、討入りに同意する者が14～15人程度で十分に成し遂げられると考えたからでした。一応、大石への気遣いをしているのは一部の人達で、もし失敗したら2回目の討入りは無くなりますし、吉良「にくし」と思って討入りに参加しよう思っている残された藩士達の思いはどの様に考えていたのでしょうか。一部の藩士の考え方としては浅はかな考えで、私は納得出来ません。

　堀部はこの進言に賛同し、上方に向かい賛同同志たちと計画を練り、1702年（元禄15年）7月24日～25日に再び江戸に帰ろうと考えていました。

（浅野大学閉門と円山（まるやま）会議での重大決定）

　江戸急進派が討入りの打合せをしていたまさにその時、1702年（元禄15年）7月18日に大石の描いた浅野大学を擁立し、浅野家再興を願っていた夢が絶たれました。浅野大学が閉門の上、本家の広島藩浅野家に引取られることが決定しました。これはお家再興が事実上なくなったことを示しているのです。大石の主流派と堀部の江戸急進派の対立点であったお家再興の道が閉ざされたので、彼らは1702年（元禄15年）7月28日に、京都円山にある安養寺の塔頭（たっちゅう）「重阿弥」（江戸時代民衆へ席を貸す貸座敷・京都市東山区）で円山会議を開き、大石は10月に江戸の下り、「吉良邸に討入ることを正式に表明」しました。

　この円山会議は前もって予定したものではなかったので、参加者は偶然に京都周辺にいた浪人達だけでした。この会議に参加出来たのは19人で、内17人は後に仇討ちに参加した人達でした。そして会議は当然秘密であったため、議論の詳細は一切わからないのです。今日伝わる円山会議の内容は、初期の実録本「赤城義人伝（せきじょうぎじんでん）」で創出されたものです。

（＊１）前記の「進藤源四郎」は俊式（としもと）（1647年～1730年）と言い、通称を源四郎と言います。俊式は[大石良欽](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%A4%A7%E7%9F%B3%E8%89%AF%E6%AC%BD)（良雄の祖父）の娘お通を妻とし、お通の死後は、良雄の推挙で[石束毎公](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%9F%B3%E6%9D%9F%E6%AF%8E%E5%85%AC)の甥・田村瀬兵衛の娘を後妻としました。のちに良雄の次女「[るり](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%A4%A7%E7%9F%B3%E3%82%8B%E3%82%8A)」を養女にし、大石家とは大変な重縁をもっていました。大石との盟約も出し、お家再興を目指していましたが、浅野大学が浅野家本家の広島藩にお預けが決まってからやる気をなくし、大石の説得も受け入れず、盟約を返納して討入りには参加しませんでした。俊式は閏8月22日付けの断りの書状を送って、再度脱盟の意思を伝えていました。この脱盟の背景には、浅野本家に仕えた叔父の[進藤俊重](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%80%B2%E8%97%A4%E4%BF%8A%E9%87%8D)が仇討ち参加を自重するように説得していたためとされています。

木の板

低い精度で自動的に生成された説明（赤城義人伝―Yahoo Japanから転載）

（註）討入り事件は1702年か1703年か？

①討入り事件が起ったのは「元禄15年12月14日」です。「元禄15年」は西暦の「1702年」に相当しますが、この「12月14日」は、当時日本全国で使われていた「貞享暦」（現代日本で言う「旧暦」とほぼ同じと考えて差し支えありません）による日付で、グレゴリウス暦（現代日本で言う「新暦」）では翌年の「1月30日」になります。

②川崎支部便りでは、「貞享暦に従えば1702年」の出来事として記載しています。

③この事件は海外でも関心を持ったらしく、1870年にミッドフォードが「47RONIN」([2013年](https://ja.wikipedia.org/wiki/2013%E5%B9%B4%E3%81%AE%E6%98%A0%E7%94%BB)公開の[アメリカ合衆国](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A2%E3%83%A1%E3%83%AA%E3%82%AB%E5%90%88%E8%A1%86%E5%9B%BD%E3%81%AE%E6%98%A0%E7%94%BB)の[ファンタジー](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%95%E3%82%A1%E3%83%B3%E3%82%BF%E3%82%B8%E3%83%BC%E6%98%A0%E7%94%BB)・[アドベンチャー映画](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%86%92%E9%99%BA%E6%98%A0%E7%94%BB)。[忠臣蔵](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%BF%A0%E8%87%A3%E8%94%B5)をモチーフとし、[四十七士](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%B5%A4%E7%A9%82%E6%B5%AA%E5%A3%AB)に[キアヌ・リーブス](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%AD%E3%82%A2%E3%83%8C%E3%83%BB%E3%83%AA%E3%83%BC%E3%83%96%E3%82%B9)演じる架空の人物であるカイが参加)というタイトルで赤穂事件を英訳しています。その5年後には、Ｆ．Ｖ．ディキンズが『仮名手本忠臣蔵』を全訳（1971年にドナルド・キーンによる新しい英訳を発表）し、日本文化の特徴を表すものとして外国に知られています。

支部の活動

①　2021年11月20日（土）に「ミステリーツアー」を開始し、母校の歴史を追体験しました。

②　2022年1月22日（土）は夢キャンパスで、14時から定例講演会を開催します。

「日本人の1％しか知らない幻の奥沢線」（経営工学OB　染野代表）

 ご存じですか

外国人（旭日中綬章）が日本に学んだ10のこと

  2014年に英国人マーチン・バローが旭日中綬章を受賞しました。前天皇から授与された理由は、英国で日本文化を広め、日英親善に貢献したことです。マーチンはジャーディン・マセソン商社日本社長等を務め、イギリス商工会議所の日本代表でもありました。ジャーディン・マセソン照会は、幕末から日本に深く関わり、長崎のグラバーは同商会の代理店でした。

マーチンは東日本大地震の直後に、日本人の姿に感動して、「日本から学ぶべき十点」を知人たちに発信しました。１．おだやか（カーム）さ、号泣し、泣きわめく姿をまったく見ることが無かった。個人の悲しみを内に秘め、悲しみそのものを昇華させた。　　２．尊厳（ディグニティ－）整然と列を作って、水や食料が渡されるのも待った。罵詈雑言や、奪い合いは一切なかった。　　３．能力（アビリティ－）驚きくべき建築技術。建物は揺れたものの、倒壊しなかった。　　４．気品（グレイス）人々は、必要なものだけを購入した。買い占めることなく、そのためすべての人が必要なものを手にすることが出来た。　　５．秩序（オーダー）車がクラクションを鳴らしたり、道路を占拠したりすることがまったくなかった。　　６．犠牲的行為（サクリファイス）福島第一原発で事故が起きた時に、50名の作業員が海水を注水するために、逃げずにその場で作業を続けた。彼らの犠牲的行為は、どう報いてあげられるだろうか。　　７．優しさ（テンダーネス）食堂は値段を下げ、ATMには警備が付くこともなく、そのまま使えるようにされた。弱者には、特に助けが差し伸べられた。　　８．訓練（トレーニング）老若男女の分け隔てなく、すべての人々がどうすれば良いかが分かっており、その通りに行動した。　　９．媒体（メディア）メディアは、冷静かつ穏やかに報道をした。　　10．良心（コンスィエンス）店で買い物をしている人々たちは、停電になると手にしていた商品を棚に戻して、店を出た。　　日本人が自然に身に着けていた高い倫理的な行動規範は、世界に感動を巻き起こしのです。

皆様のご意見・ご感想をお待ちしています。（連絡先：[k\_yamagishi@hexel.co.jp](mailto:k_yamagishi@hexel.co.jp) 山岸宛）